

## 不登校経験者が不登校経験を意味づけするまでの過程に関する検討

小林 千紗・福崎 俊貴

鳥取大学大学院医学系研究科臨床心理学専攻

### 要約

本研究は不登校経験者が不登校経験を意味づけするまでの過程について、不登校経験者8名を対象にインタビュー調査を実施し、複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM) によって分析した。結果共通の過程として、不登校状態に陥ってから不登校状態を脱するまでに【自責感・自己否定・今後の見通しが立たない】という思いを抱くことが明らかとなった。不登校状態を脱した後は個別性の高い径路をたどっていること、個人によって様々な社会的ガイド・社会的方向づけを受けていることも明らかとなった。不登校を脱した後の径路は複雑だが、協力者全員が不登校経験に対し意味を生成できていた。満足感を持って不登校経験者が人生を歩んでいくためには、意味づけの内容が肯定的か否定的かということではなく、不登校経験の意味が生成されているか、されていないかが重要となってくるのではないかと考えられた。

キーワード：不登校経験, 意味づけ過程, TEM

### I. はじめに

#### 1. 不登校問題の現状

文部科学省 (2021) の調査によると、令和2年度小・中学校の不登校児数は約196,000人となっており、平成25年以降増加傾向にある。また、高等学校の不登校児数は約43,000人となっている。このように、依然多いまの不登校児数は社会的な問題として取り上げられることも多く、不登校支援の必要性はいうまでもないだろう。不登校支援においては、松井・笠井 (2013) が不登校が解消した後も不登校経験者自身が問題を扱えずに継続している可能性を指摘するように、不登校の最中だけでなく不登校の予後にも注目する必要がある。また、不登校の予後調査は、「不登校中にはわからなかった子ども達の思いを知ること繋がる」とされており (上田, 2019)、必要性も示されている。また松坂 (2010) は、特に生活において不登校が占める割合、不登校後に受ける不登校の影響が大きい経験者によって不登校経験が言語化されることは、不登校問題の解決や予防の策を考える上では非常に意義深いデータとなる可能性を指摘している。さらに川上 (2020) は、「不登校を呈した『その後』に目を向け、不登校を呈したことで彼らの実際の生活や発達の側面にどのよ

うな影響を及ぼしているかを明らかにすることは、今現在不登校状態にある児童・生徒への対応やその後の支援の在り方において、新たな視点を得ることができるのではないかと述べている。これらのことから、不登校経験者の予後を調査することは重要である。

しかし、実際に不登校経験者の予後を調査した研究は多くない。そのような中不登校経験者の予後調査として「どのような不登校経験が、どのように経験者の人生に取り込まれているのか」という調査を行った松坂 (2010) は、不登校が本人の人生にいかに取り込まれていくかに焦点を当てることによって、不登校を通して生きていく個人の生を考える土台を創出することができるのではないかと考えられると述べており、不登校経験をいかにその人の人生に生かすことができるかを考える必要があると指摘している。また、不登校経験者でありながら現在は不登校支援に携わっている方を対象にインタビューを行った井倉 (2016) は、「『進路の問題』という言葉に代表されるように、当事者が不登校状態にある時点だけでなく、不登校のその後を見据え、本人の人生における生き方の問題として、より大きな視点からの支援や働きかけの必要性が認識されてきている」と指摘して

いる。このように、これまで行われてきた不登校経験者の予後研究からは、現在不登校となっている児童が不登校経験を今後の人生に取り込むことができる・不登校を通して生きていくことができるための支援の必要性を見て取れる。

## 2. 不登校経験の意味づけ

前述した“不登校経験者が不登校経験を人生に取り込むことができる・不登校を通して生きていくことができる”という状態は、どのような状態であろうか。不登校経験者の不登校経験の意味づけについて調査している井倉(2016)は、「不登校経験が当事者の人生においてどのような意味、役割を持つかという問いは、人生の中で経験がどう意味づけられていくのかという問いとして受け取ることができる」と述べている。つまり、“不登校経験者が不登校経験を人生に取り込むことができる・不登校を通して生きていくことができる”という状態は、“不登校経験が意味づけできている状態”であると考えられる。

不登校経験の意味づけについての先行研究では、意味づけについて定義している研究とそうでない研究とがある。定義している研究として、義務教育期間に不登校を経験した13名を対象に、不登校経験の意味づけについてインタビュー調査を行った松坂(2010)のものがある。松坂(2010)は不登校経験の“意味”について、ナラティブ・アプローチにおける“経験の意味”とロゴセラピーにおいて価値化されている“人生の意味”という2つの理論を用いて定義している。その結果、不登校経験の意味を“経験の意味”として位置づけ、経験者の現状やこれまで積み重ねてきた経験の総体としての人生に対して不登校経験が持つ影響・役割として捉えている。さらに、小学校から高校の間で過去に不登校経験がある15名を対象に、不登校経験を意味づけていく過程においてどのような葛藤や思いがあるのかを検討した木戸・上手(2020)も、Park(2010)やDanhauer, Carlson, & Andrykowski(2005)を引用し意味づけについて記述をしている。Park(2010)は、意味づけの研究は、意味づけの過程(Meaning Making)に関するもの、生成された意味(Meaning

Made)に関するもの、その双方を含むものの3つがあると述べている。さらに「意味づけの過程(Meaning Making)」の結果として、「生成された意味(Meaning Made)」があるとしている。Danhauer, Carlson, & Andrykowski(2005)は、意味づけを“ネガティブな出来事に対する解釈を変容していく認知的対処”と捉えている。これらのことから、木戸・上手(2020)は、不登校経験は、不登校経験者にとってネガティブな出来事であったと捉え、その不登校経験に対する解釈を変容していく過程を「意味づけの過程」、その結果生まれた現在の意味づけ・解釈を「生成された意味」としている。本研究では、研究目的や分析方法が近い木戸・上手(2020)の定義を参考に、不登校経験に対する解釈を変容していく過程を「意味づけの過程」、その結果生まれた現在の意味づけ・解釈を「生成された意味」として捉える。

不登校を通して生きていくという視点は、現役の不登校児童生徒にとっても、自分の現状から考えられる未来にいかなる不利益が存在するのかという不安を煽るだけの知見ではなく、不登校体験を通じていかに自分が成長できる可能性があるのかということを示す知見になり得ると考えられ、さらに不登校者が〈いま・ここ〉において主体性を持って生きるために有効なデータになることが期待される(松坂, 2010)。また、伊倉(2016)は、不登校の当事者が不登校の『その後』、どのように経験を問いなおし、意味づけを行っているのかに着目することで、不登校を1つの生き方として理解し、臨床的援助を必要とする当事者理解の一助となると述べている。これらのことから、不登校経験者がどのように不登校を意味づけているかを示すことは、不登校当事者を理解することにつながると言える。そして不登校経験者がどのように不登校を意味づけているかを示すことは不登校支援者が支援するために役立つ情報となるだけでなく、現在の不登校児にとっても、今後に期待や安心を持つことができ、現状を主体的に生きるための手助けとなると考えられる。以上のことから不登校経験の意味づけを明らかにすることは重要であると考えられる。

### 3. 不登校経験の肯定的・否定的意味づけ

現在不登校経験の意味づけについて論じている研究を取り上げると、関・田村（2017）は、「不登校経験者の不登校に対する意識はその時々々の自分への自信や生活環境への満足度によって揺れ動くもの」と述べている。また、松坂（2010）は、「不登校経験の意味づけは多様に変化していく可能性をもっている」とし、井倉（2016）は、「起こった出来事は不変であるとしても、どのように経験を語り、どのような点に着目して経験を捉え直していくかということは、決して固定的なものにはなり得ない。語りの中で生じた意味づけは、人生の様々な場面において変化し、新たな意味が見出される可能性がある」と指摘している。これらのことから、不登校経験の意味づけはその時々で変化するものであるということが考えられる。

森田（2003）は就学も就労もしなかった者と比較して、社会的な所属先を持つ者の方が、自らの出会いや経験を評価し、その経験が将来の生きる自信につながることを指摘している。そして、中学校時代に不登校であった子どもたちがその後何らかの“所属”につながるかどうかは、その後の生き方を予想する上で重要な観点になることを示唆している。高橋（2010）はフリースクールや居場所、適応指導教室などにおいて「自分の居場所を見つけること」や「友人と関係を深めること」が、不登校経験を肯定的に意味づけするきっかけになることを示唆している。さらに、不登校経験を肯定的に意味づけるためには、今の出会いや今の頑張りといった、今をどう過ごすかが大切であるとの指摘（伊藤、2015）や、他者との信頼関係づくりが必要不可欠であるということ（川上、2020）が述べられている。

これらの先行研究からは、不登校経験は現在の状況（自尊心・満足感・所属感・他者との関係など）が良いと肯定的に意味づけられるという共通認識があることがわかる。そしてそれは価値のあることとして、否定的な意味づけよりも肯定的な意味づけを目指すことが重要視されているように感じられる。

しかし先行研究を概観すると、不登校経験の意味づけには肯定的側面や否定的側面があるが、こ

れらは同時に存在する可能性があること（関・田村、2017）や、不登校経験の意味づけは一概に肯定しきること否定しきることできないことが言われている（松坂、2010）。これらのように、肯定的な意味づけの中にも、不登校経験に対するマイナスな感情が含まれており、意味づけは両面性を持ったものであるという認識が伺える。つまり、肯定的な意味づけと同程度に否定的な面にも目を向ける必要性があると考えられる。本研究では生成された意味の肯定面と否定面の両面に着目して詳細に検討していく。

### 4. 本研究の目的

これまでの先行研究の対象者は、不登校経験がありながらも現在は就学または就労していたり、不登校支援に関わっていたりというように、不登校を「乗り越えた」と表現できるような方々である。本研究では、先行研究よりも対象者の幅を広げたくて、複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：TEM）を用い、不登校経験の意味づけが現在のものに至るまでの過程に焦点を当て、時間経過の中で変化プロセスとして捉え、提示することを目的とする。不登校の背景やその後の経過の多様化・複雑化が指摘されている中で、より幅広い不登校経験者を対象とし、共通プロセスを見出すことは、支援の際や、不登校経験を理解するにあたり有用な知見を提供できると考えられる。さらに、TEMの概念である社会的ガイド（social guidance：SG）・社会的方向づけ（social direction：SD）に注目し、意味づけを促進・阻害する要因がどのようなものなのか、プロセス上のどこに現れるのかについて明らかにすることを目的とする。

また、本研究では、不登校経験の意味づけ過程の全体像を捉えるために、「意味づけの過程」と、その結果「生成された意味」の双方に着目することとする。特に「生成された意味」の肯定面・否定面の両面に焦点を当て、不登校後の経過や現在の状況との関連性を考察する。

## II. 方法

### 1. 研究対象者の概要とデータ収集方法

Table 1 協力者の基本情報

協力者	年齢	性別	不登校期間	不登校の原因	現在の所属	家族構成	同居家族	既往歴
A	22	男	中1夏休み明け～中3終わり(約3年)	・進級時の不適應 ・教職員との関係をめぐる問題 その他	大学生	祖母, 祖父, 母, 兄	一人暮らし(シェアハウス)	心身症・小児喘息 アレルギー性鼻炎・発達障害(グレーゾーン)
B	25	男	小2途中～中3終わり(約8年)	・いじめ ・教職員との関係をめぐる問題	介護職	父, 母, 兄, 妹	兄	なし
C	23	女	中1途中～中1終わり(約1年)	・教職員との関係をめぐる問題 その他	学童の職員 ・キリスト教伝道師 ・音楽家	祖母, 父	左に同じ	通病障害
D	30	男	小5途中～中2終わり(約4年)	その他	無職	妻	左に同じ	なし
E	22	女	中1途中～中3(約3年)	学業の不振	無職	母, 妹	母, 妹, 母のおおば夫婦, 母のおおばの弟	ASD・心身症
F	26	女	中2夏頃～中3(約1年半)	いじめ	事務職	祖母, 父, 母, 姉, 弟	左に同じ	なし
G	23	女	小6の6月～中3(約3年半)	いじめを除く友人関係をめぐる問題	建築業	母, 姉	母, 姉, いとこ	なし
H	31	女	高2の5月～高2終わり(約10ヶ月)	いじめを除く友人関係をめぐる問題	図書館司書	父, 母, 弟	左に同じ	なし

研究対象者は、著者が不定期で参加している、A県不登校親の会を通じて募集をおこなった。不登校経験者で、インタビュアーに不登校経験を語れる20歳以上の者を募集し、8名(男性3名,女性5名)が集まった(以下,協力者)。協力者の基本情報はTable1に示す。年齢は22歳～31歳,不登校期間は約10ヶ月～約8年であった。なお,不登校の原因は文部科学省(2021)の結果を参考にし,文部科学省の定める不登校の要因に当てはめた。不登校の要因は,学校に係る状況として「いじめ」・「いじめを除く友人関係をめぐる問題」・「教職員との関係をめぐる問題」・「学業の不信」など,家庭に係る状況として「親子の関わり方」など,本人に係る状況として「無気力・不安」などがある。学校に係る状況,家庭に係る状況,本人に係る状況のいずれにも該当しないものをその他として表記した。

インタビューでは,始めに基本情報として名前・性別・現在の所属(職種または所属学校名)・家族構成・既往歴を尋ねた。その後質問項目に沿って半構造化面接を行った。インタビューにおける質問項目はTable2に示す。質問項目は不登校経験の意味づけについて研究している先行研究の質問項目を参考に定めた。不登校経験は自尊心・満足感・所属感・他者との関係などが良いと肯定的に意味づけられるという共通認識がある(森田,2003;高橋,2010;伊藤,2015;川上,2020)。そのため,不登校中から現在にかけては,意味づけに影響を与えているかの考察のため,その時の所属や人間関係,それらに対する満足感などを尋ねている。

2. 調査手続き

個別に,一人当たり1時間～4時間のZoomによる半構造化面接をおこなった。インタビューの様子は,協力者の同意を得た上で録画・録音をおこなった。また,本研究は鳥取大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:21A076)。

3. データ分析方法

TEM用いて分析を行った。TEMは時間を捨象

Table 2 インタビュー質問項目

①不登校の始まり
・いつから始まったか、何が原因だったか ・その時の所属や家族・友人関係、それに対する満足感
②不登校中
・どのように過ごしていたか ・不登校状態の自分をどのように思っていたか (見通しが立たなかった? 脱すると思っていた? 何も考えられなかった?) ・その時の所属や家族・友人関係、それに対する満足感
③不登校後
・不登校状態を脱した時期、きっかけ ・不登校経験をどのように思っていたか (不登校経験は人生の中でどのようなものだと感じていたか、肯定的なものか否定的なものだったか) ・その時の所属や家族・友人関係、それに対する満足感
④現在
・不登校後の進路(現在の所属や家族・友人関係)、それに対する満足感 ・不登校経験をどう意味づけているか (不登校経験は、人生にどのような影響を与えたと考えている? それは肯定的? 否定的?)
⑤意味づけについて
・意味づけ過程を口頭で確認 ・初めて意味づけできたのはいつのタイミングだったと思うか ・意味づけできた(不登校経験が自分の人生に与えた影響を考察できた)きっかけがあるか ・意味づけが変わったことはあったか、不登校経験に対する見方の変化はあったか (それはどんな時に、どんなものからどんなものへ?)
⑥面接を受けての感想

Table 3 TEMで用いる概念と本研究での位置付け

概念	本研究の位置付け
等至点 (EFP)	不登校経験の意味を生成する
両極化した等至点 (P-EFP)	不登校経験の意味を生成できない
分岐点 (BFP)	意味づけが変わった出来事
社会的ガイド (SG)	「不登校経験の意味を生成する」方向へと誘導する心理・環境的要因や文化・社会的支援
社会的方向づけ (SD)	「不登校経験の意味を生成できない」方向へと誘導する心理・環境的要因や文化・社会的圧力
必須通過点 (OPP)	・不登校状態に陥る ・不登校状態を脱する など

せず個人の変容を社会との関係で捉え記述しようとする文化心理学の方法論である(安田・サトウ, 2012)。TEMは個々人がそれぞれ多様な径路をたどったとしても等しく到達するポイント(等至点, equifinality point: EFP)があるという考え方を基本とし、人生径路の可能性と多様性を描き出す方法論的枠組みである。本研究は不登校経験者の不登校経験の意味づけについて、個々人の過程の多様性を損なうことなく、意味づけの時間的変容を捉えようとするものであり、TEMという方法が適していると考えた。

TEMにおける主要な用語は等至点に加え、必須通過点(obligatory passage point: OPP)、分岐点(bifurcation point: BFP)、社会的ガイド(SG)、社会的方向づけ(SD)がある。必須通過点とはある地点に移動するために通常多くの人を通るべきポイントである。分岐点とは非可逆的時間の中で様々な個人の選択や出来事があり、人生の径路が分かれていくポイントを示す。その選択を進めていく際に働いているなんらかの援助的力が社会的ガイド、逆にその働きかけが阻害・抑制的なものとして影響する場合は社会的方向づけと呼ばれる。分析枠組みの設定として、TEMにおいて用いられる用語の概念と本研究における位置付けをTable3に示す。

分析手続きとしては、協力者1人ずつの逐語録を作成し、①不登校経験の内容とそれに伴う思いや葛藤、②不登校経験に対する意味づけに関する語り、③不登校経験の意味づけに影響を与えていると考えられる事柄を抽出し、見出しをつけ、協力者ごとに時間経過に沿って並べた。それまでの経過と異なる意味づけが生まれたところを分岐点(BFP)とした。その時にBFPにはたらいだ社会的ガイド(SG)と、社会的方向づけ(SD)を抽出し、個別のTEM図を作成した。次に、個々の語りや分岐点(BFP)を比較し、共通する語りや分岐点(BFP)を見出した。さらに全体としての必須通過点(OPP)と等至点(EFP)を決めた。これは研究が進む上での変更もありうるとした。この際、妥当性を検討するため、臨床心理学を専攻する大学院生数名及び大学教員と、複数回検討を行った。

### III. 結果

事柄を抽出し、見出しをつけ、協力者ごとに時間経過に沿って並べた。それまでの経過と異なる意味づけが生まれたところを分岐点(BFP)とした。その時にBFPにはたらいだ社会的ガイド(SG)と、社会的方向づけ(SD)を抽出し、個別のTEM図を作成した。

等至点を「不登校経験の意味を生成する」と定め、協力者8名の語りを分析した「不登校経験者が不登校経験を意味づけするまでの過程」をFigure1に、本研究での位置付けに沿って抽出された、TEMで用いられる概念の一覧をTable4に示す。Figure1に示す結果を詳細に記述するにあたって、見出された各経験を〔 〕、必須通過点(OPP)、分岐点(BFP)、等至点(EFP)を【 】、社会的ガイド(SG)、社会的方向づけ(SD)は《 》で示し、協力者の発言を引用する際は「」で示す。なお、必須通過点の【不登校状態に陥る】【不登校状態を脱する】の不登校とは、年間欠席日数が30日以上という、文部科学省の定義上の不登校としている。

【不登校状態に陥る】状態から、【不登校状態を脱する】まで、協力者8名全員が【自責感、自己否定、今後の見通しが立たない】という思いを抱きながら過ごしていた。この必須通過点の前に、Cさん、Gさんは不登校になり始め当初に〔学校にいかなくて良い安心感〕を抱いていた。その後ほとんどの協力者は《家族関係、友人関係、所属感、様々な支援、自己の努力》(SG4)といった社会的ガイドと、《家族関係、友人関係、偏見、低い満足感、支援や学校への不満、居場所感のなさ、発達障害》(SD2)といった社会的方向づけがせめぎ合いながら【自責感、自己否定、今後の見通しが立たない】という思いを抱いたまま卒業や転校などによって不登校状態を脱していた。BさんとDさんのみ【自責感、自己否定、今後の見通しが立たない】という必須通過点を通った後、他の協力者とはちがう径路をたどっている。Bさんは不登校期間中に《友人関係、偏見》(SD1)という社会的方向づけがありながらも、《家族の支え、達成感、責任感、所属感》(SG1)という社会的ガイドを受け、【不登校をポジティブに過

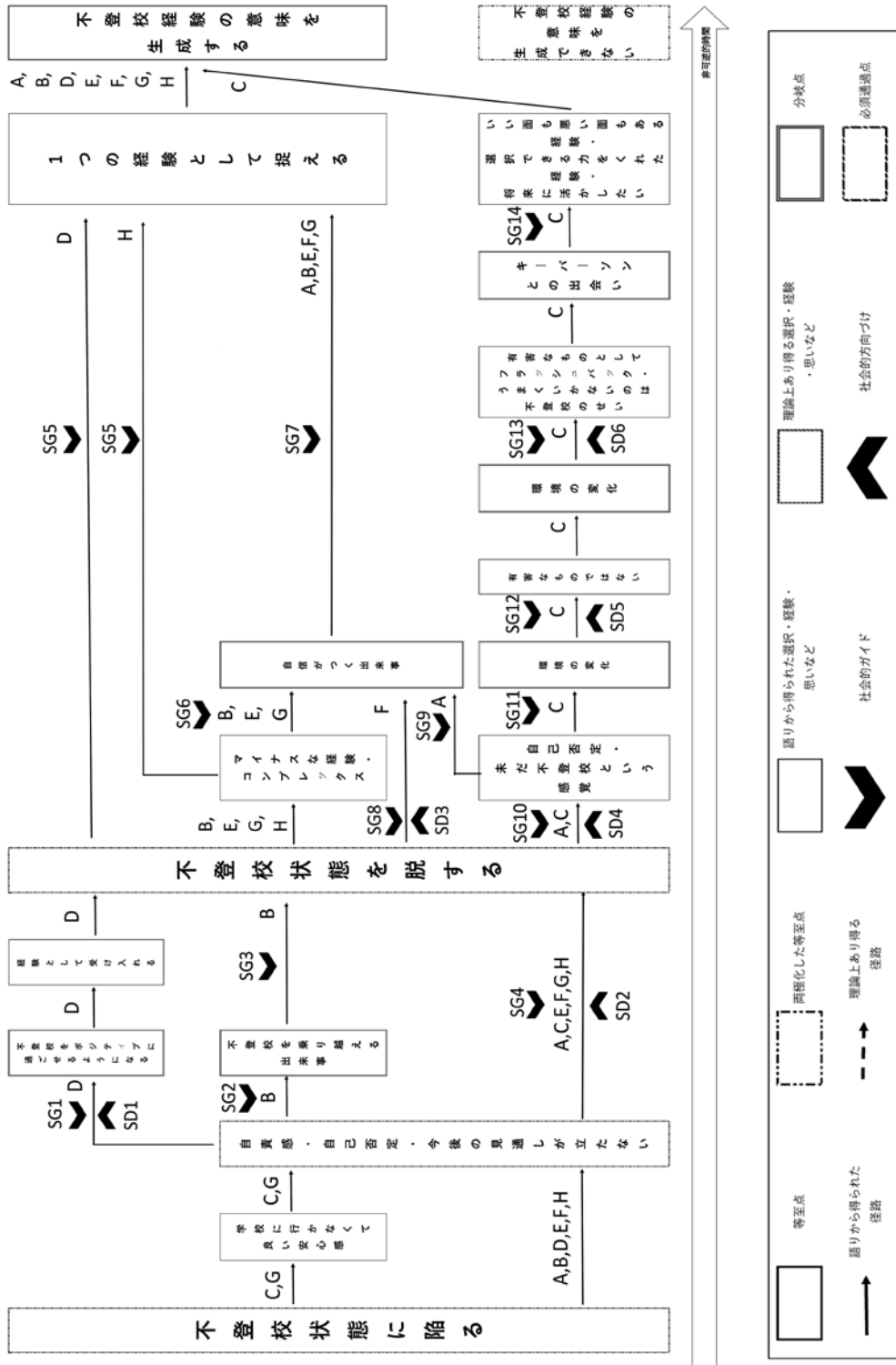


Figure 1 協力者全体のTEM図

Table 4 TEMで用いた概念の一覧

概念	本研究の位置付け
等至点 (EFP)	不登校経験の意味を生成する
両極化した等至点 (P-EFP)	不登校経験の意味を生成できない
分岐点 (BFP)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校をポジティブに過ごせるようになる</li> <li>・不登校を乗り越える出来事</li> <li>・自信がつく出来事</li> <li>・環境の変化</li> <li>・キーパーソンとの出会い</li> </ul>
社会的ガイド (SG)	<ul style="list-style-type: none"> <li>《家族の支え, 達成感, 責任感, 所属感》(SG1)</li> <li>《友人関係, 家族関係, 学校からの支援》(SG2)</li> <li>《登校できている人への憧れ》(SG3)</li> <li>《家族関係, 友人関係, 所属感, 様々な支援, 自己の努力》(SG4)</li> <li>《変化のない満足感》(SG5)</li> <li>《家族関係, 友人関係, 学校からの支援, 所属感, 精神的安定》(SG6)</li> <li>《自信, 自己肯定感, 幸福感, 家族関係, 友人関係, 満足感, 自己理解, 人とのつながり》(SG7)</li> <li>《満足感, 家族関係, 友人関係》(SG8)</li> <li>《家族関係, 友人関係, 満足感, 所属感》(SG9)</li> <li>《家族関係, 様々な支援, 満足感》(SG10)</li> <li>《友人関係, 学校からの支援, 役割, 所属感》(SG11)</li> <li>《様々な人との出会い》(SG12)</li> <li>《受け入れてくれる人の存在》(SG13)</li> </ul>
社会的方向づけ (SD)	<ul style="list-style-type: none"> <li>《友人関係, 偏見》(SD1)</li> <li>《家族関係, 友人関係, 偏見, 低い満足感, 支援や学校への不満, 居場所感のなさ, 発達障害》(SD2)</li> <li>《家族関係の悪化》(SD3)</li> <li>《友人関係, 学校への不信感, 居場所感のなさ》(SD4)</li> <li>《友人関係, 家族関係》(SD5)</li> <li>《人間関係づくりの苦しさ, 人間不信, 居場所感のなさ, 精神面の不調》(SD6)</li> </ul>
必須通過点 (OPP)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校状態に陥る</li> <li>・自責感・自己否定・今後の見通しが立たない</li> <li>・不登校を脱する</li> </ul>

ごせるようになる】という状態に至った。その後不登校経験を〔経験として受け入れる〕ようになってから不登校を脱している。Dさんは不登校中に《友人関係, 家族関係, 学校からの支援》(SG2)という社会的ガイドを受けながら【不登校を乗り越える出来事】を体験している。その後《登校できている人への憧れ》(SG3)を持ちながらも不登校の経験に対して新たな意味は生成されずに不登校状態を脱している。

不登校を脱してからは, 最終的に協力者全員が等至点である【不登校経験の意味を生成する】に至っている。不登校中に不登校経験を〔経験とし

て受け入れる〕ようになったDさんは, 不登校を脱した後も, 《変化のない満足感》(SG5)を社会的ガイドとしながら不登校経験を〔1つの経験として捉える〕という意味に変容しながら等至点へ向かっていた。Bさん, Eさん, Gさん, Hさんは不登校を脱した後, 不登校経験を〔マイナスな経験・コンプレックス〕として受け止めている。その後Hさんは分岐点となる出来事は通過しないものの, 《変化のない満足感》(SG5)を社会的ガイドとしながら不登校経験を〔1つの経験として捉える〕という意味に変容しながら等至点へ向かっていた。Bさん, Eさん, Gさんは《家族



## 不登校経験者が不登校経験を意味づけするまでの過程に関する検討

関係、友人関係、学校からの支援、所属感、精神的安定》(SG6)という社会的ガイドを受けながら【自信がつく出来事】を経験している。この【自信がつく出来事】はAさん、Fさんも不登校状態を脱した後に経験する出来事となっている。Aさんは不登校を脱した後も、Cさんとともに《家族関係、様々な支援、満足感》(SG10)という社会的ガイドがありながら、《友人関係、学校への不信感、居場所感のなさ》(SD4)という社会的方向づけも受け、〔自己否定・未だ不登校という感覚〕を抱き続けていた。Aさんはその後《家族関係、友人関係、満足感、所属感》(SG9)などの社会的ガイドを受け【自信がつく出来事】を経験している。Fさんは不登校を脱した後、《満足感、家族関係、友人関係》(SG8)という社会的ガイドと《家族関係の悪化》(SD3)という社会的方向づけがせめぎ合いながら【自信がつく出来事】を経験するという径路をたどっている。

【自信がつく出来事】を経験したAさん、Bさん、Eさん、Fさん、Gさんは《自信、自己肯定感、幸福感、家族関係、友人関係、満足感、自己理解、人とのつながり》(SG7)といった社会的ガイドを受け、【1つの経験として捉える】という状態に至っている。

不登校状態を脱した後に、Aさんとともに〔自己否定・未だ不登校という感覚〕を抱いていたCさんは他の協力者とは異なる径路をたどっている。【自己否定・未だ不登校という感覚】を抱きながら進学という【環境の変化】と《友人関係、学校からの支援、役割、所属感》(SG11)という社会的ガイド、《友人関係、家族関係》(SD5)という社会的方向づけを受け、不登校経験を〔有害なものではない〕と受け止めている。その後の進学や就職・離職という【環境の変化】と《様々な人との出会い》(SG12)という社会的ガイド、《人間関係づくりの苦手さ、人間不信、居場所感のなさ、精神面の不調》(SD6)という社会的方向づけを受け、〔有害なものとしてフラッシュバック・うまくいかないのは不登校のせい〕と受け止めている。その後【キーパーソンとの出会い】という経験、《受け入れてくれる人の存在》(SG13)という社会的ガイドを受け、〔いい面も悪い面もあ

る経験・選択できる力をくれた経験・将来に活かしたい]ものとして不登校経験を意味づけていた。

## V. 考察

本研究では不登校経験者が不登校経験を意味づけするまでの過程についてTEMによって分析した。不登校を経験した8名が、不登校経験を意味づけていく過程において共通してたどる径路と個別性のある径路の両方が示された。共通の過程として、不登校状態に陥ってから不登校状態を脱するまでに【自責感・自己否定・今後の見通しが立たない】という思いを抱くことが明らかとなった。不登校状態を脱した後は個別性の高い径路をたどっていること、個人によって様々な社会的ガイド・社会的方向づけを受けていることも明らかとなった。不登校を脱した後の径路は複雑だが、協力者全員が不登校経験に対し意味を生成できていた。個別性が高いながらも、ほとんどの協力者は不登校経験を〔1つの経験として捉える〕という状態に至っている。そして、このような意味づけに至る協力者のほとんどが径路の中で分岐点として【自信がつく出来事】を経験していると示された。

以下に、不登校経験の意味づけ過程について「意味づけの過程」に着目して・「生成された意味」に着目して考察したのち、意味づけに影響を与えていると考えられる要因について考察を行う。

## 1. 不登校経験を意味づけするまでの過程—「意味づけの過程」に着目して

不登校経験者の不登校経験の意味づけ過程についてTEMで分析した木戸・上手(2020)は、分析の結果、コアカテゴリとサブカテゴリを生成してTEM図を作成している。以下、木戸・上手(2020)の分析結果によるコアカテゴリを〈〉、サブカテゴリを( )で表す。

本研究では、不登校中、協力者全員が【自責感、自己否定、今後の見通しが立たない】という必須通過点を通っていた。このことは、不登校中は主に〈自己への思い〉〈学校への思い〉〈他者に対する経験〉が単一ではなく相互に関わり合い、葛藤を抱え苦しみ、その結果両極化した等至点である

【不登校に意味が見出せない】状態に至っているという木戸・上手(2020)の結果と一致する。本研究で見出された【自責感, 自己否定】と【今後の見通しが立たない】はそれぞれ木戸・上手(2020)における〈自己への思い〉の中の《自己否定感》と、【不登校経験に意味が見出せない】と一致すると考えられる。本研究では協力者それぞれで社会的ガイド・社会的方向づけが違っても関わらず不登校中、全員が不登校に対して意味を生成できていないということから、不登校自体が大変ストレスフルな、社会的方向づけとなる出来事であると考えられる。

不登校中の意味づけ過程について特徴的な協力者としてDさんを挙げる。不登校を脱する前に不登校経験の意味を生成していたのはDさんのみであった。関・田村(2017)は不登校時期のことを自分の人生の一部として認めることはアイデンティティの確立につながる要素であると考えられると述べている。Dさんはインタビューの中で、「不登校だった時期っていうのが、なんか自分の人生の中で、切り取りたいとか、隠したりとか、そういうのはないから。今の自分の1部みたいな。過去も。アイデンティティの部分だと思うんですけど、自分の経験とか生き方とかが、人からの評価とかじゃなくて、自分が自分を見た時に、隠したいとか、恥ずかしいとか。(中略)それがこうだんだんとなんか回復していった。だからある意味普通に学校に行ったりとかもできたのかなあと思いますね」と語っている。このように達成感や所属感といったものを感じながら、アイデンティティを形成することができたことが不登校中にも関わらず意味を生成できた大きな要因であったのではないかと考えられる。達成感などの社会的ガイドを受けながら至った【不登校をポジティブに過ごせるようになる】という分岐点は、他の協力者が通る【自身のつく出来事】と同じ役割のものになっていたのではないかと考えられる。また、木戸・上手(2020)はPark(2010)をもとに、生成された意味として、「経験に対する納得や受容」、「自身の成長や肯定的変化の知覚」、「アイデンティティ変容」、「個人のもつ価値観の変容」、「ストレスラーの意味の再評価」を挙げている。Dさ

んの〔経験として受け入れる〕という捉え方は、「アイデンティティ変容」に当てはまると考えられるため、意味を生成していたと言えるだろう。

不登校状態を脱した後の意味づけ過程に関して、CさんとCさん以外の協力者と二分できると考えられる。Cさん以外の協力者は、最終的に、不登校経験の肯定面も否定面も感じながら【1つの経験として捉える】という意味に至っていた。この意味づけに至ると、周りの環境が変化しても意味づけが変容することはなかった。木戸・上手(2020)は、不登校を脱した後、必須通過点を【現実面の肯定的変化】【内的な肯定的変化】として、等至点である【不登校を経験してよかった】と不登校経験を肯定的に捉えるようになるかと述べている。木戸・上手(2020)の述べる【現実面の肯定的変化】【内的な肯定的変化】はサブカテゴリーとして〈進路の実現〉〈充実感〉〈自己理解の深まり〉〈目標の設定〉〈環境の変化〉〈人の存在の多様性への気づき〉が挙げられており、本研究での【自信がつく出来事】や社会的ガイドとして現れていたものに一致すると考えられる。等至点の設定が違うが、意味を生成するまでにたどる過程は木戸・上手(2020)の結果と概ね一致している。本研究では【1つの経験として捉える】際に、不登校経験の肯定的な面も否定的な面も感じながら捉えている。肯定的な意味づけに限定しているかそうでないかという点で、最終的に到達している地点が木戸・上手(2020)と本研究では異なっているが、肯定的に意味づけていると明言できる人でなくても同じ経路をたどっているということが明らかとなった。

また、Cさんはうまくいかない出来事に遭遇するたびに不登校を関連づけ、不登校に原因を帰属させていた。しかし、【キーパーソンとの出会い】により、他の協力者の意味づけに近い意味を生成しているように感じる。この【キーパーソンとの出会い】は木戸・上手(2020)の〈他者からの受容〉〈頼れる人の存在の気づき〉と一致するだろう。Cさんも今後さらに【現実面の肯定的変化】【内的な肯定的変化】が起こることなどで他の協力者のように、周りの環境に影響を受けず、不登校経験を捉えられるようになる可能性が高いと考えた。

## 不登校経験者が不登校経験を意味づけするまでの過程に関する検討

また、AさんとCさんは、不登校状態を脱した後も不登校経験を意味づけることができず、〔未だに不登校という感覚〕を持ち続けていた。不登校状態を脱した後も不登校という感覚を持ち続ける要因は、社会的方向づけが大きく働いていたからではないかと考えられる。本研究の場合、《友人関係、学校への不信感、居場所感のなさ》という社会的方向づけが同時期に働いていた社会的ガイドより大きな影響を与え、意味を生成できなかったのではないかと考えられる。

さらに、環境によって不登校経験に対する思いが何度も変わっているCさんを代表として、一度経験の意味を生成しても、意味づけ内容は変化していつている。これは、関・田村(2017)・松坂(2010)・井倉(2016)が示している、不登校経験の意味づけはその時々で変化するものであるということの裏付けとなる結果である。その一方で、本研究では〔1つの経験として捉える〕に至ってからは、その後の環境などが変化しても意味づけが変わらなかった協力者が多数であった。このことから、一定の意味づけに達すると環境や状況によらず意味づけが変化しなくなる可能性が示された。

## 2. 不登校経験を意味づけするまでの過程—「生成された意味」に着目して

先述したように、生成された意味としては、「経験に対する納得や受容」、「自身の成長や肯定的変化の知覚」、「アイデンティティ変容」、「個人のもつ価値観の変容」、「ストレスの意味の再評価」が挙げられている(Park, 2010; 木戸・上手, 2020)。本研究で明らかとなった最終的な意味づけは、全ての協力者において「経験に対する納得や受容」に当てはまるものとなっていると考えられる。従って、全ての協力者において不登校経験の意味づけができていない・不登校経験の意味が生成されていないと言えるだろう。

さらに、協力者によって最終的に生成された意味を大別すると①肯定的なもの：〔今につながる良い経験だった〕(Bさん)・〔より前向きに過去の出来事として捉える〕(Fさん)、②肯定面も否定面も感じているもの：〔プラス面もマイナス

面も感じながら1つの節目だった経験として捉える〕(Aさん)・〔いい面も悪い面もある経験・自分を見極める選択できる力をくれた経験・将来に活かしたい〕(Cさん)・〔プラス面もマイナス面も両面の影響がある出来事/経験として捉えている・自分の一部〕(Dさん)・〔マイナス面もプラス面も感じながら淡々と受け入れられるように〕(Gさん)、③中立的なもの：〔マイナス感情がなくなる・珍しいものではない・辛い時の基準となる経験〕(Eさん)、の3つに分けられる。また、本研究の協力者は就業している、または就業や就学していないとしても現在の生活に高い満足感を抱いている方であった。先行研究では、過去の不登校について肯定的な意味づけができていくほど、現在の自分に対し高い自尊感情をもつということ(伊藤, 2015)や、就学も就労もしなかった者と比較して仕事であれ学校であれ、社会的な所属先を持つ者の方が、自らの出会いや経験を評価し、その経験が将来の生きる自信につながるということ(森田, 2003)、不登校経験者の不登校経験に対する現在の意味づけが、その後の適応に関連するとも想定されている(木戸・上手, 2020)。このようにこれまでの先行研究では、不登校経験の意味づけが肯定的であればあるほど、その後の適応が良いと述べられていた。しかし本研究の結果では、肯定的な内容だけではない意味が生成されているが、社会適応が良いと捉えられる協力者が多い。これらのことから、生成された意味づけ内容が肯定的か否定的であるかは重要な事項ではないのかもしれない。満足感を持って不登校経験者が人生を歩んでいくためには、意味づけの内容が肯定的か否定的かということではなく、不登校経験の意味が生成されているか、されていないかが重要となってくるのではないかと考える。

## 3. 意味づけに影響を与える要因

分析の結果、本研究で意味づけに影響を与えていると考えられる、社会的ガイド・社会的方向づけとして抽出されたものは、「家族関係・友人関係・学校支援/不信感・所属感・満足感・自己肯定感(達成感や責任感や自信など)・自己理解・人や社

会とのつながり・偏見・発達障害」などが挙げられる。森田(2003)・高橋(2010)・伊藤(2015)・川上(2020)によると、不登校経験は自尊心・満足感・所属感・他者との関係などが良いと肯定的に意味づけられるという共通認識があった。本研究の結果と照らし合わせると、家族関係や友人関係、人や社会とのつながりなどは、川上(2020)が述べている、他者との関係として包含されるものが多く、これらは確かに社会的ガイド及び社会的方向づけとして働いていた。しかし先述したように、生成された意味が肯定的なものに限らなかったことから、肯定的に意味づけるために働いていたというよりも、不登校経験の意味を生成するために働いていたものだと考えられる。

先行研究では明らかとなっていないが本研究で示された影響要因としては、「自己理解・発達障害」が挙げられる。これらはAさん、Eさんという、ともに発達障害に関連する診断を受けている方から抽出されている。不登校と発達障害との関連について、「今後の不登校への対応の在り方について(報告)」(文部科学省, 2003)から、不登校の要因としてLD, ADHDなどとの関連が明記されている。また、「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」(文部科学省, 2005)でも、発達障害児童生徒の不登校問題を指摘し、学校全体で特別支援教育を推進する必要性を述べている。これらからは発達障害と不登校が密に関連しており、世間でも関連について注目が集まっていることが示されている。実際に加茂・東條(2010)は、発達障害における不登校の合併割合は、一般の不登校の割合(小学校0.32%, 中学校2.89%)よりも高いと示している。このように発達障害と不登校の関連性は高いことがデータでも示されている。しかし不登校経験に対する意味づけ研究において、対象者を発達障害児・者に限定しているものは見当たらない。本研究で自己理解が意味づけに影響を与える要因として抽出されたが、これが発達障害者特有の要因なのかについては、対象者を限定するなどしてさらに研究を深めていく必要があるだろう。これに関連して、協力者によって社会的ガイドとなるものと、社会的方向づけとなるものが違っていた。例えば同じ家族関係であっ

ても、社会的ガイドとなる人もいれば社会的方向づけとなる人もいた。これらから、個人の特性や個人を取り巻く基本的な環境というものが意味づけに影響している可能性が考えられる。基本的な情報として聴取した家族構成や既往歴に関連すると考えられる。

さらに、社会的ガイドや社会的方向づけが変わっていても意味づけ内容が変わっている協力者もいた。例えばHさんは、不登校を脱し、一度[マイナスな経験・コンプレックス]として不登校経験をとらえていたが、その後《変化のない満足感》以外の明確な社会的ガイドがないまま、[1つの経験として捉える]という意味を生成していた。これは時間経過の中で経験として捉えることができるようになっていったのではないかと考えられる。時間経過も社会的ガイドとなって意味の変容に影響を与えていた可能性が示唆された。

#### 4. 本研究の限界点

本研究のインタビューでは、不登校中に受けていた支援についての質問項目を設定していなかった。どのような支援が欲しいと思っていたかを質問項目に加えていると、不登校児支援に役立てられる情報となり得たのではないかと考える。

また、AさんやCさんのように、定義上の不登校ではなくなっても不登校という感覚を持ち続けているという結果があることから、不登校経験者にとって「不登校を乗り越える」とはどのようなことなのかを再考する必要性を感じた。本研究の協力者のように不登校経験の意味が生成されなかった場合、学校という期間が終わった後も不登校が形を変え、引きこもりといった形で続くことも考えられる。

研究対象者について、結果として今回の協力者は比較的社会的適応が良いと考えられる者に限られてしまった。現在の状況と意味づけの関連性の考察のためにも、今後はさらに幅広く協力を求め、分析対象を広げることが必要だと考えられる。同時に、協力者は社会的適応が良いと捉えられると述べたが、「良い」というのは著者の主観的判断に過ぎない。尺度などの点数を用いて「良い」と判断する基準を設けるべきであった。

## 不登校経験者が不登校経験を意味づけするまでの過程に関する検討

さらに、意味づけに影響を与えると考えられる要因は明らかとなったが、実際に量的に関係性を見た研究は見当たらない。各要因と意味づけについての関連性が数値で表されると強い根拠として示されるのではないだろうか。

最後に、本研究は各協力者に対して1度しかインタビューをしなかったため、各時期の社会的ガイド・社会的方向づけがどのくらいの大きさで拮抗しあっていたかということや、意味づけ過程のTEM図が協力者本人も納得するものかであったかなどを協力者と確認し合う作業ができなかった。何度かインタビューを重ねることで妥当性をより確かめられたと考える。

## 文献

- Danhauer,S.,Carlson,C,&Andrykowski,M. (2005). Positive psychosocial functioning in later life: Use of meaning-based coping strategies by nursing home residents. *Journal of Applied Gerontology*, 24, 299-318.
- 井倉 未樹(2016). 不登校経験の語りを読む：当事者の経験の意味づけとその過程. 神戸大学発達・臨床心理学研究, 15, 35-42.
- 伊藤 美奈子(2015). 不登校経験者による不登校の意味付け—不登校に関する不登校意味付け尺度項目の収集—. 奈良女子大学心理臨床研究, 2, 5-13.
- 加茂聡・東條吉邦(2010). 発達障害と不登校の関連と支援に関する現状と展望. 茨城大学教育学部紀要(教育科学), 59, 137-160.
- 川上 知子(2020). 不登校経験者の「その後」に関する研究動向と展望. 常葉大学教育学部紀要, 40, 51-61.
- 木戸 歩実・上手 由香(2020). 不登校経験者の不登校経験に対する意味づけ過程の検討. 広島大学心理学研究, 20, 71-81.
- 松井 美穂・笠井 孝久(2013). 不登校経験者の不登校経験の意味づけとその影響—「問題」のとりえからみる支援のあり方—. 千葉大学教育学部研究紀要, 61, 77-86.
- 松坂 文憲(2010). 不登校経験者が語る“不登校経験の意味” —自己資源化の可能性の提案—. 岩手大学大学院人文社会科学部研究紀要, 19, 39-56.
- 文部科学省(2003). 今後の不登校への対応の在り方について(報告)(不登校問題に関する調査研究協力者会議報告) [https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1283839/www.mext.go.jp/b\\_menu/public/2003/03041134.htm](https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1283839/www.mext.go.jp/b_menu/public/2003/03041134.htm) (2022年1月28日閲覧)
- 文部科学省(2005). 特別支援教育を推進するための制度の在り方について(中央教育審議会答申) [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/fieldfile/2017/09/22/1212704\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/fieldfile/2017/09/22/1212704_001.pdf) (2022年1月28日閲覧)
- 文部科学省(2021). 令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果 [https://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt\\_jidou01-100002753\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt_jidou01-100002753_1.pdf) (2022年1月28日閲覧)
- 森田 洋司(2003). 不登校—その後—不登校経験者が語る心理と行動の軌跡. 教育開発研究所.
- 太田 美里・岡本 祐子(2018). レジリエンスに関する研究の動向と展望—環境要因と意味づけへの着目—. 広島大学心理学研究, 17, 15-24.
- Park, C. L. (2010). Making Sense of the Meaning Literature: An Integrative Review of Meaning and Its Effects on Adjustment to Stressful Life Events. *Psychological Bulletin*, 136, 257-301.
- 関 鋼二・田村 節子(2017). 不登校経験が不登校経験を意味づけていく過程に関する研究 —就学・就業をした中学時不登校経験者へのインタビューを通して—. 東京成徳大学臨床心理学研究, 17, 135-144.
- 高橋 歩(2010). 不登校経験への意味づけに関するPAC分析. 日本教育心理学会第52回総会論文集, 536.
- 上田 果林(2019). 不登校経験の意味づけと不登校児に対する対応の検討—不登校経験者の語りから—. 京都先端科学大学人文学部学生論文集, 18, 146-159.
- 安田 裕子・サトウタツヤ(2012). TEMで分かる人生の径路—質的研究の新展開—. 誠心書房.